

# 大学と学生

平成9年

第387号

7

特集・21世紀に向けた介護関係人材育成の  
在り方について

文部省高等教育局学生課編



●論文●

## 高齢者介護に対応した薬学教育について

内山 充

(財)日本薬剤師  
研修センター理事長

はじめに

大学教育の主たる目的は社会に役立つ人材を養成して世に送り出すことにある。したがって社会がどのような人材を求めているかを知らずして教育はできない。

高齢化社会は地球上のあらゆる先進国が、いずれは必ず行き着く社会構造である。我が国は、文化水準の向上と科学技術の推進に国の総力を挙げて努力したことにより、早くもこの新しい社会を経験することになったのであって、世界中が我が国の対応を注目しているといえる。

高齢化社会への対応を考えるには、対策とか保障という言葉で表されるような「守り」の感覚ではなく、寿命

の長い社会を活用しようという積極的な考えで捕らえ、先進国らしい社会システムを作り上げなければならぬ。

### 一 医療と介護

高齢化社会が進むにつれて社会保障は医療から介護の方向へとシフトする。保健医療と福祉介護は目的や方法が異なるので、「高齢者医療」と「高齢者介護」とを混同しては論じられないが、介護が、生を全うしたいという人として当然の希望に報いるものであるならば、人の生命と健康を守ることを使命とする医学・歯学・薬学・看護学等の医療担当職種にあるものとしては、介護においても、それぞれ自らの専門領域に裏付けされた知識と技能

を駆使して、常に指導的立場に立ち、社会から期待される役割を果たす責任を担っていることを忘れてはならない。

高齢化社会において介護は、疫病や災害のように偶発的、地域的のものではなく、すべての人々にとって他人事ではありえない。また、近年の医療が患者の視点に立ったチーム医療へと改善されつつあるように、介護も高齢者を中心において、医療・福祉関係者はもちろんのこと、親族知人等がチームを組んで当たらなければ、高齢者が十分に納得するような介護はできない。したがって、介護は既存の教育分野のいずれかが担当すればよいというものではなく、すべての教育分野が、それぞれ果たすべき責任をはっきりと見定めて教育の中に生かし、将来それらが互いに協力して社会的支援体制を形成できるようにする必要がある。

## 二 薬学教育の持つ問題

薬学教育が、有機化学を中心とする伝統的な体系から発して、時代に即した新しい学問技術を導入しつつ、今日では近代的な分子生物学を包含するまでに成長し、活

性のある物質としての医薬品についての教育研究のために果たしてきた実績は十分に評価されて良い。しかし、物質を追求することに集中するあまり、人間との対応を大切に考える感覚には乏しかった嫌いがある。

言い換えれば、大学では臨床の場で患者に対して医薬品がどう使われているかなど、薬剤師の働きに関する課題を十分に教育に取り入れていなかったように思える。薬剤師と薬学は別であると考えていた人さえ多かった。

薬学卒業生の多くは、学生時代に基礎医療の教育も薬剤師実務の実習も不足のまま卒業し、医療の現場にあって他の医療職と協力する上で大変な苦勞をしている。

筆者自身、現在の薬剤師、特に医療の実務に従事している薬剤師の生涯研修の推進に携わる立場に立ち、薬剤師から生の声を聞き、さらに医師を始め他の医療職種の人たちからの薬剤師に対する評価を聞くにつけても、現代の患者中心のチーム医療に貢献し、あるいは医薬分業時代の地域医療を支えて行く薬剤師の責任を果たすためには、どう考えても卒前の基礎医学の教育と薬剤師実務実習が不十分であると思えてならない。

医療に関する知識は、卒後に現場で学べば良いといわれる向きがあるが、卒後の研修や生涯研修は、決して卒前教育に代替し得るものではない。卒前に充実した教育がなされていないと卒後の研修の能率も上がらないことは明らかである。

このような状況では、薬剤師養成のための唯一の教育分野としての薬学が、現代の医療分野からの、そして患者からの要望に十分に応えているとはいえないし、また多額の国費による薬剤師養成補助にも報いていないことを痛感する。

しかし、最近では薬学系大学関係者の中にもこの事実を認識し、その改善に向けて努力を始めている教育者がおられる。その方々の努力を評価しつつ成果を期待したい。

### 三 薬学教育と介護

薬剤師は、医療においては薬物治療に伴う各種の薬学的指導、あるいは医薬品についての適正な処置及び取り扱いについて責任をもっているが、介護においてもそれと同じ役割を担うことによって、積極的な関与をするこ

とができる。また、介護は医療に比べ、高齢者との直接の接触をより大切にするので、これまでの薬学教育において欠けていた対人感覚の教育を補うことに一層の重点を置くことが必要であろう。

このことは介護の具体的テクニックを薬学で教育しようというものではない。しかし薬学教育で学ぶ知識と技術の中には、介護に必要な、すなわち高齢者のQOL (quality of life) の改善に役立つものがかなり多く含まれている。それらをもとに、高齢者介護の社会システムに主体性をもって参加し、薬学の果たすべき役割と意義を明らかにし、その責任を全うするべきである。

#### ア 医薬品の適正使用と介護

これからの薬学教育には、従来からの伝統的教育内容に加えて、医療への積極的貢献を目指して、薬物療法における医薬品の適正使用に関係の深い項目が多く取り入れられると思われるが、薬剤師が、介護に参加する場合においても、このような知識が介護チームの中での薬剤師の独自性として評価されるに違いない。

すなわち、要介護者はほとんどの場合何らかの医薬品を使用している。必ずしも病気の治療を目的としてではなくても、医薬品が介護の一つの方法として用いられることもある。その場合、高齢者では特に吸収や代謝等の生理機能の個人差が大きいこと、あるいは往々にして服用等についての注意を守れないこと、さらに他の食品や医薬品との相互作用が出やすいことなどがあるので、適切な服薬指導や薬歴管理等の薬学的な助言が必要となる。

これらについての理論と対処法は、薬学の基礎教育において現在でもかなり重視されているが、今後さらに増え続ける高齢者介護を念頭に置きながら、高齢者の生理学的、生化学的あるいは生物薬剤学的特殊性に焦点を当てた教育を充実することが、より一層重要となろう。

#### イ 介護に必要な医薬品等の開発

これまで薬学教育は、医薬品や医療用具の開発を通じて医療に貢献して来た実績をもっている。介護においても同じように、介護に役立つ医薬品や介護用品の創製については大いに期待できよう。

医療の分野ではパーキンソン病やアルツハイマー病に代表される高齢者の難病の改善薬が待望されているが、介護の観点からは、高齢者の最大の悩みである行動障害を補助あるいは改善するために有効な医薬品等が求められるなど、医療用とはやや価値観を異にするものがある。

褥瘡（とこずれ）にはどれ程多くの人たちが苦しみ、その防止や治療に効果的な薬物がいかに待望されているか、予想をはるかに上回る現実がある。また、高齢者の生理機能の特徴を勘案した飲みやすい剤形の開発や便利な服用法の設定などについても、今後教育面において大いに力を入れなければならない。

#### ウ 介護サービスへの参画

そのほか薬剤師は、単に上に述べたような技術的貢献のみならず、地域に密着した医療の担い手としての経験を生かして、積極的に地域の高齢者ケアサービス体制整備に参画してほしい。介護支援専門員あるいはその指導員としての活動のほか、要介護認定やケアプランの策定にも、その職能を発揮するべきである。

我が国の社会保障制度が高齢者対策に急速に比重を移しつつあることからみても、二一世紀に向かって薬剤師は介護保険に参画することが必須であり、そのためにも医療人としての自覚をしっかりと持つよう、大学において教育することが必要である。

#### 四 これからの薬学教育

高齢者介護を支える医療人としての責任を果たすために、今後質の高い薬剤師の養成が急務となる。社会の求める薬剤師を教育するには、従来からの薬学の特色を生かしつつ、それに基礎医療と薬剤師実務実習を加えて、薬学教育年限を六年に延長して教育内容の充実を図るといふ抜本的改革が焦眉の急である。しかし現段階では部分的修正程度に止まっている状態にあるのは、誠に残念でならない。

薬学教育が医療と介護に十分に責任を果たせない状態にあったとしても、教育の欠陥は数年程度の短期間で影響が顕在化してくるものではない。しかし表に現われてからでは手遅れであり修復は極めて困難となる。それが

原因となって医療の近代化に支障が生じたり、介護に必要な社会システムの形成が阻害されることを懸念するものである。

悩みや苦しみは、それを経験したり、あるいは身近に触れた者でないと本当のところは分からない。健康を保ち病を癒す保健医療の分野での薬剤師の役割と薬剤師教育の必要性は、患者やその家族の立場を自ら経験するか、それらと身近に接する機会によって初めて理解し認識できることが多いであろう。高齢者介護も全く同じである。しかし教育者たるものは、自分に無関係であったり、体験がないからといって、無理解であったり改善に消極的であってはならない。

薬学における医療実務の重要性すら理解せず、それを具体的に薬学教育に反映できないようでは、介護の重要性を認識してそれを教育に反映させることなど、到底期待できない。筆者は、薬学のすべての教育者がこのような現状に甘んじているとは思えない。今後、医療と介護に対する効果的な対応が、薬学教育の中に生かされることを確信している。